

## がん検診を受診しましょう！

- 当社の定期健康診断(以下「定期健診」)は、「労働安全衛生法」により、事業主(会社)に実施することが義務付けられている法定項目(11項目)にとどまらず、健康保険組合(以下「健保組合」)と協働し、任意項目であるがん検診等を組み込み、自己負担なく受診できる内容となっているなど非常に充実したものとなっています(下図参照)。
- 特に「がん検診」は、厚生労働省においてエビデンスに基づき死亡率の低下に効果があるとされ受診が推奨されている「5つのがん検診」を網羅しています。
- 自己負担なく受診できる「がん検診」は「受けなきゃ損」とも言えます。
- 中川先生が議長を務める厚生労働省の委託事業「がん対策推進企業アクション」がHPで公開しているパンフレットの一部を紹介しますので、あらためて確認し、定期健診のなかで「がん検診」を積極的に受診するようにしましょう。

### 当社の定期健診の枠組み

義務付けられている**法定項目**(11項目)  
＜会社が実施(会社負担)＞

1. 既往歴及び業務歴の調査
2. 自覚症状及び他覚症状の有無の検査
3. 身長・体重・腹囲・視力・聴力の検査
4. 胸部エックス線検査
5. 血圧の測定
6. 貧血検査
7. 肝機能検査
8. 血中脂質検査
9. 血糖検査
10. 尿検査
11. 心電図検査



**任意項目**  
＜健康組合と協働実施(健保組合負担)＞

＜定期健診への組込項目＞

- ・胃部X線検査(胃がん検診) \*1
- ・便潜血検査(大腸がん検診) \*1
- ・骨密度検査 \*2

＜申込みが必要な項目＞

- ・子宮頸がん検診 \*3
- ・乳がん検診 \*4
- ・ピロリ菌・ペプシノゲン検査 \*5
- ・前立腺PSA \*6

- \*1. 40歳以上の方
- \*2. 「E健診」の50歳～70歳(5歳刻み)の女性の方
- \*3. 20歳以上の女性の方
- \*4. 35歳以上の女性の方
- \*5. 35歳(「C健診」)の方
- \*6. 「F健診」の方

【参考】当年度から次の点が一層充実します。

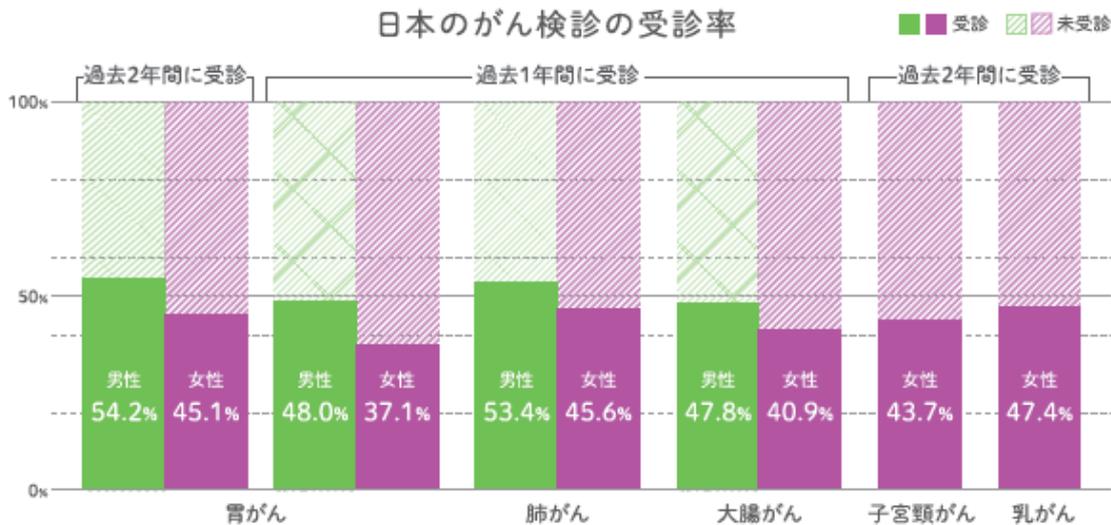
- (ア)「B健診」の対象者のうち40歳以上の方に「胃部X線検査」「便潜血検査」を追加。
- (イ)「E健診」の対象者のうち50歳～70歳(5歳刻み)の女性の方に「骨密度測定」を追加。
- (ウ)次の健診項目で「二次健診」を受診する場合、自己負担費用の一部を補助(5,000円限度)。

・胸部X線検査、胃部X線(胃内視鏡)検査、便潜血検査、乳がん検診、子宮頸がん検診

※詳細は「通知：2024年度定期健康診断」を参照。

# がんは「早期発見」が重要。 「がん検診」は、もはや義務と言えます。

日本人のがんは増えているが、がん検診受診率は、OECD(経済協力開発機構)加盟国38カ国の中では最低レベル。諸外国の子宮頸がん、乳がんの検診受診率は50～85%に対し、一方日本ではこれまで検診受診率50%を目標に啓発し向上してきているものの、40～50%程度とまだまだ低いのが現状です。



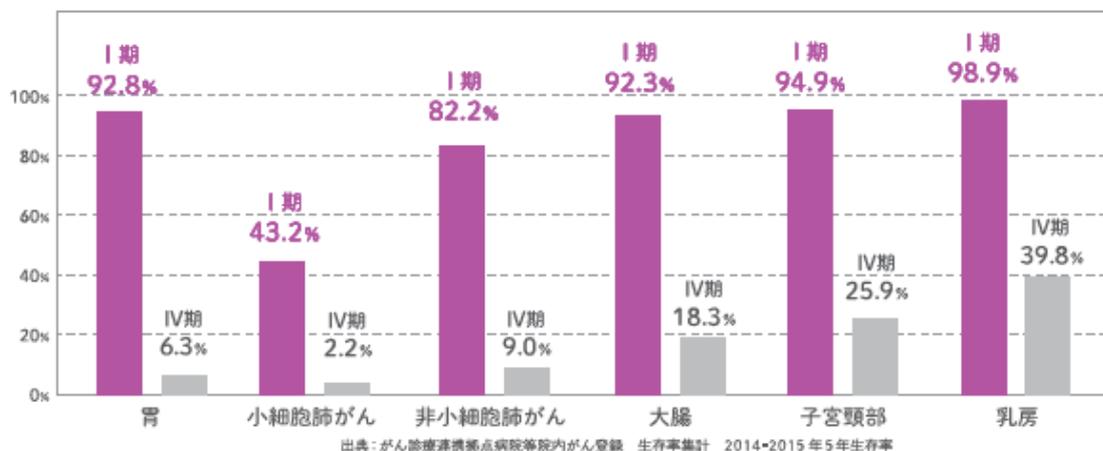
※子宮頸がんと乳がん検診は、「2年に1度」の受診が推奨されているため、過去2年間に検診を受診したと回答した方の数に基づく検診受診率です。胃がん検診は、「2年に1度」に加え、X線検査については「年1回」も実施できますので、過去2年間と過去1年間の両方に基づく受診率を掲載しています。

出典：厚生労働省「2019年国民生活基礎調査の概況」

## 早期で発見できれば、がんは治ります！

病期(ステージ)が早期であれば早期であるほど、がんが治る可能性が高くなるだけでなく、仕事との両立もしやすくなり、がんの治療が身体的にも、経済的にも、心理的にも軽くなります。

### I期とIV期で発見された時の5年生存率(ネットサバイバル)の比較



[5年生存率] がんと診断された場合に、治療でどのくらい生命を救えるかを示す指標。がんと診断された人のうち5年後に生存している人の割合について、純粋に「がんのみが死因となる状況」を仮定して計算しています。

100%に近いほど治療で生命が救えるがん、0%に近いほど治療で生命を救い難いがんであることを意味します。

一般的にがんは治療後、5年(乳がんは10年)経過して、「再発」がない場合、治療したと捉えられます。

# 効果が認められた検診を受けることが重要です。

がん検診は科学的に有効な検診を、正しく受けることが大事です。

日本では、胃・肺・大腸・子宮頸部・乳房の5つのがん検診で、死亡率の減少効果が認められ、推奨されています。

## 胃がん検診

50歳以上の男女  
(2年に1回)

※当分の間、胃部X線検査については、40歳以上、年1回の実施もできます。



〔胃内視鏡検査〕



〔胃部X線検査〕

## 肺がん検診

40歳以上の男女  
(1年に1回)

※高危険群には喀痰細胞診も併用できます。



〔胸部X線検査〕

## 大腸がん検診

40歳以上の男女  
(1年に1回)



〔便潜血検査〕

## 子宮頸がん検診

20歳以上の女性  
(2年に1回)

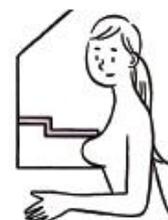


〔細胞診〕

## 乳がん検診

40歳以上の女性  
(2年に1回)

※視触診は推奨しない。



〔マンモグラフィ〕

### COLUMN

#### 学校での「がん教育」が本格化。がん知識と命の大切さを医師等から学ぶ。

中学・高校の学習指導要領に「がんも取り扱う」と明記されたのを受け、教科書にも取り上げられるなど、がんの授業が本格化しています。

第4期がん対策推進基本計画では、医師やがん経験者などの外部講師活用を積極的に進めて小・中・高校でのがん教育の充実を図る方向性を改めて強調。そのために市町村レベルまで教育委員会と衛生主管部局が連携して取り組むよう求めています。

気がかりなのは、子ども達ががんを知り、大人達ががんを知らないという“逆転現象”が起きつつあることです。